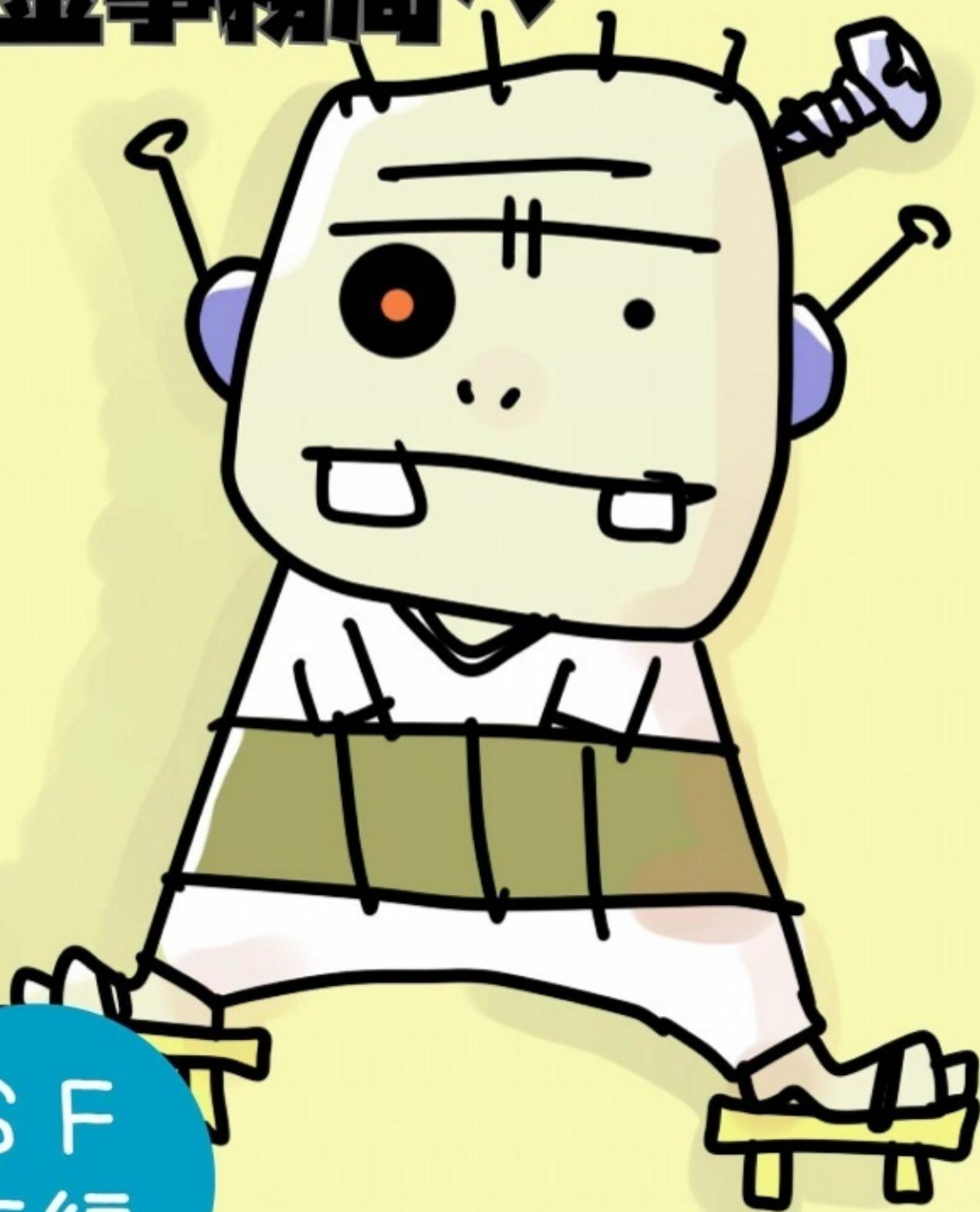


ぶうごそ 年金事務局へ

八海宵一



SF
短編

ようこそ年金事務局へ

年金事務局の始業チャイムが鳴ると同時に、その客はやって来た。

「ワシの年金が支払えないとは、どういうことだ！」

威圧的な声で開口一番そう言うと、相手はこちらが勧める前にカウンターのイスに腰かけ、睨みつけてきた。

またか……。

オレは半ばあきらめながら端末を操作し、事務的な口調で尋ねた。

「恐れ入りますが、お客様のパーソナルデータを確認いたしますので、ID、もしくはご本人様と確認できるものをご提示ください」

「なんだ、その人を馬鹿にした言い方は！」

客はますます怒り出し、大声を上げた。幸い、年金事務局には、ほかの客がまだ来ていなかったもので、まわりの迷惑になることはなかった。オレは内心毒づきながら、つとめて冷静な口調でいった。

「申し訳ございません。お気に障ったのならあやまります。以後、気をつけますので、IDのご提示をお願いいたします」

「ワシは客だぞ！」

突然、脈絡のないことを言いだした。だが、これもいつものことだ。オレは頷いて答えた。

「存じております」

「客の顔くらい、おぼえてないのか！」

お前みたいなやつ、おぼえてるに決まってるだろう、と喉元まで出かかったが、オレは愛想笑いを浮かべ、その言葉をのみこんだ。

「申し訳ございません。決まりですので、お願いいたします」

「ここは従業員の教育がなってないなあ！」

わざと奥に聞こえるような大声をあげたあと、相手はIDカードをシャツの胸ポケットから取出し、投げてよこしてきた。オレはカウンターからそれを拾い上げると、端末のスロットに差し込み、情報を呼び出すと、両手で相手に返した。

コボネカワ・H・寅三。

ディスプレイにさまざまな個人情報が表示され、年金記録もすぐに確認できた。

年金の支給は、4か月前に停止していた。

「西暦2214年の6月に支給されたのが最後になっていますね」

オレが当然のこのように伝えると、相手は物凄い形相で睨みつけてきた。

「だから、なぜ、そんなことになってるのかって聞いているんだよ！」

「お客様、落ち着いてください。まわりのお客様の迷惑になります」

「なんだとっ！」

言われたコボネカワは周囲を見回した。一連のバカなやりとりをしている間に、ほかの客もやって来ていて、別の窓口やフロアーにいるのが見えた。みんな一様に怪訝な顔をしている。

さすがのコボネカワも少しだけ冷静さを取り戻し、声のトーンを下げた。

「だから、なぜ、4か月前に支給が終わってるのか説明しろと言ってるんだ。ワシはこうして生きてるんだぞ、なぜ、年金の支給が止まるんだ！」

「それにつきましては、昨日もお話いたしましたとおり——」

言いながら、オレは端末を操作し、病歴情報を呼び出した。正確な日付を言わないと、また、ごちゃごちゃとうるさく言われてはかなわない。

「今年の7月12日に人工胃の移植手術を行われたからです」

「なぜ、胃の手術をしたくらいで、年金が止まるんだ！」

「コボネカワ様の場合、胃が最後の臓器だったからです」

「わかるように説明しろ！」

コボネカワ氏は、チタン製の拳をカウンターに叩きつけた。殴られたら痛そうだ。

やれやれ。

オレは昨日と同じ説明をした。

「コボネカワ様は過去に、心臓、肺、脾臓、膵臓、肝臓、小腸、大腸……それに脳の人工臓器を移植されており、さらに皮膚、血管、毛髪においても人工のものと総交換されていますので、コボネカワ様のオリジナルの部位は、胃が最後となっております」

「それがどうした！」

「コボネカワ様の人間としての最後の部分が、移植手術により摘出されてしまいましたので、こちらとしては、年金の支給をいたしかねる状態です……」

「お前は、ワシが人間じゃないとでも言うつもりか！」

べつにオレが言ってるんじゃない。国や法律がそう言ってるんだ。

内心うんざりしながら、オレは懇切丁寧に現行法の説明をし、年金制度の説明をした。つまり、年金は人間に支払われるものであり、アンタはすでに人間じゃない、ということを、あまり刺激しないよう、まわりくどく丁寧に——。

すると、享年214歳のチタンとバイオ素子の塊は、怒りで体を震わせた。

「人権問題だ！ これは人権問題だぞ！」

コボネカワ氏は人工眼を赤色に光らせ、胸につけていたオレのIDを読み取ると、すごい勢いで出て行った。

行先はもう、わかっていた。

オレは耳につけていたハンズフリーフォンを操作し、市役所の人権課につないだ。

「すみません。また、そちらに行きましたので、対応よろしくをお願いします」

それだけ言うと、相手は暗い声で「了解」とだけ返してきた。今日も来るのか、そんなニュアンスだった。

コボネカワ氏のクレームは、もはや日課だった。

年金事務局に来て、まず年金の支給を要求し、市役所に行って、現行法を変えろと要求し、最後に医療器メーカーに行って、移植した臓器の調子が悪い、慰謝料を支払えと言う。いまや、人工パーツの医療技術は格段に進歩し、不具合など見られないというのに……。

疲れを知らないコボネカワ氏は、明日も元気にここへやって来ることだろう。

やれやれ。

オレは深い溜息をついたあと、気持ちを切りかえ、次の客を呼んだ。

「お待たせしました。つぎの方、どうぞ」

「アナタ、一体、どういうつもり！ どうして、私の年金が支払われないのよ！」

甲高い声をあたりに響かせ、その客はこちらが勧める前にイスに腰かけた。

年金事務局は、こうした客が後を絶たない。

ようこそ年金事務局へ

<http://p.booklog.jp/book/101211>

著者：八海宵一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yaumiyoiti/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101211>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101211>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ